

# 論文における問題の立て方

神戸大学大学院経営学研究科 教授

國部 克彦  
Katsuhiko Kokubu

## 出発点が最難関

研究論文を書くに当たって、最も重要で最も難しいことは、問題を立てることである。初学者は、この「問題がなければ論文にはならない」ということになかなか気がつかない。だから、いつまでたっても論文がまとまらないという人は、問題が立てられていない人であることが多い。その場合でも、問題を立てられていないことに気がついていればまだ希望はあるが、問題が立てられていないことにすら気付いていない場合も多く見受けられる。

論文の書き方に関する本はたくさんあるが、それらは問題が立った後の方法に関する解説に終始しており、問題の立て方についてはほとんど触られていない。なぜなら、研究における問題とは、解説本を読めば立てることができる

ような構造化されたものではないからである。

そもそも、研究における問題とは何だろうか。試験問題が良い例で、問題であるための条件のひとつは解答があることである。試験問題にはすべて解答があり、解答がなければ問題ではない。研究とは、ある解答を論理的に導出するプロセスであるから、解答を出すためには問題が必要になるというわけである。

これが、調査と研究を分けるポイントで、調査であれば、何かを調べてまとめればひとつの形ができるが、それは勉強ではあっても研究ではない。研究と言うからには、何らかの新しい知見を生み出すことが必要となり、知見とは論理的な思考プロセスから導出されるものであるから、必然的に問題を起点として設定しなければならないことになる。

従って、問題と解答はワンセットで理解すべきである。解答のない問題は、問題ではなく単なる「謎」に過ぎない。研究対象が謎(考えても答の出ない問い)では、いつまでたっても解答は出てこないし、迷宮から脱出することも不可能である。

## 問題と解答の関係

問題が立てられない場合、それは解答がわからないからである。なぜ、解答がわからないのかというと、それは勉強不足だからである。従って、問題が立てられないということは、勉強不足であるということに気がついて、もっと勉強しなければならないのだが、こういう非常に基本的なことが案外見過ごされている。

なお、ここで言うところの解答とは、必ずしも正しい唯一の解を意味するわけではなく、論理的な導出方法に従って到達したひとつの見解にすぎない。それが正しいかどうかは他者の評価に任すべきものであり、重要なことは、その解答が正しいかどうかではなく、正しいかどうかを議論するに値する形式を整えているかどうかにある。

それでは、問題と解答はどのようにしたら掴むことができるのか。これは千差万別で一般化が難しいが、多くの問題の中から解答がおぼろげにでも見えているものから検討することが、特に、修士論文や博士論文のような時間の限られた研究では重要となる。当然、問題に対する最終的な解答は、論理的な考察を経て導出されなければならないから、研究を始める前に解答が完全な形でわかっている必要はない(完全な形でわかっていたらそもそも研究の必要がない)。

むしろ、研究とは、解答の方向性についてある程度見通しがついた段階で初めて着手できるものと言えよう。そういう意味では、問題を立てることを焦ってはならない。問題が立てられないということは解答の見通しが立たないということであり、そのような段階で無理に問題を立てても、謎の迷宮に迷い込む危険性が高い。

勉強の蓄積がなければ問題は立てられないということは、逆に言えば、勉強がある程度蓄積されれば、問題と解答のセットは必ず浮上してくるということである。それまで待つという姿勢は研究を進める上での原点となる。

## 問題から解答に至るプロセス

しかし、「問題と解答のセットは勉強すれば自然と浮上する」というだけでは、勉強をあまりしたことがない人は不安になるかもしれないので、問題から解答に至るプロセスを少し具体的に考えてみよう。

例えば、「従業員の士気を向上させる業績評価システムとはどのようなものか」という問題を取り上げるとすると、この問が研究上の問題として成立するためには、従業員の士気を向上させるポイントが明らかになっていなければならない。この場合、先行研究から重要なポイントを拾ってくるという方法はあるが、それだけでは借物の議論になってしまうので、まずは自分の頭で考えることが必要となる。

そこで、もう一度この問題を見てみると、「従業員の士気を向上させる業績評価システムとは何か」を規定するための立脚点が問題の中に存在しておらず、そのままでは解答が得られにくい形になっていることがわかるであろう。これでは、どの方向に進めばよいのかすぐにはわからない。

このような場合にお勧めの方法は問題を反転させて見ることである。「従業員の士気を向上させる業績評価システム」から検討を開始するのではなく、「なぜ業績評価システムは従業員の士気を向上させないか」という問いから出発すると、その原因はリアリティを持って目の前に浮上してくるはずである。そのリアリティこそが自分の力で考えていく基礎となるのである。

つまり「従業員の士気を向上させる業績評価システムとはどのようなものか」という問題を思いついた背景には、「業績評価システムが従業員の士気を向上させない」という状況が存在していたからであって、問題を反転させることによってそこに焦点を当てることができる。

問題を反転させる方法は単純そうに見えるが、問題の質をより一般化する方法でもあり、かなり高度な技でもある。そこまで思考が柔軟になれば、展望が開けてくるはずである。





# 研究におけるデータの捉え方

神戸大学大学院経営学研究科 教授

國部 克彦

Katsuhiko Kokubu

## データ収集のイメージ

前号において、論文における問題の立て方を検討したが、曲がりなりにも問題が立てられたならば、次はデータの収集に入らなければならない。本稿では、データを論文のための素材一般を指す意味で定義し、フィールドワークにおけるインタビューノート、サーベイ調査における記入済み質問票、各種財務・統計データ、歴史研究における史料だけでなく、学説研究における理論や言説も広くデータに含めることとする。

ちなみに、論文ではこのように論証の対象ではない用語は著者によって定義してよいことになっている。論文の構造上、定義しなければ使用できないような概念を定義せずにその意味を探求しようとしている人がいるが、これは多くの場合徒勞に終わるか、別の研究になってしまうので、注意が必要である。ただし、「私はデータを結論と定義する」というような通常の意味とかけ離れた定義は一般に受け入れられないことは言うまでもない。

本論に戻すが、データを収集する上で、最初に大切なことは、研究におけるデータのイメージをどのように持つかである。たとえば、あなたのもと「データをとる」という行為のイメージは次のど

ちらに近いであろうか。

①網で魚をすくう

②スコップで土をとる

もちろん、魚を研究しているのであれば①が正解であり、土質を研究しているのであれば②が正解であるが、ここではそのようなことを尋ねているのではない。また、魚は有機物だが、土は無機物という区別も関係ない。データをとるといふ行為のイメージを聞いているのである。

一見すると①がデータを収集するイメージに近いと思われるかもしれない。「魚」のような貴重な「データ」がとれたら、研究が進むと思われるのではないだろうか。また、「魚」のようなものがデータだと思いつき、それを探すがデータ収集だと思っている人も多いのではないだろうか。しかし、「魚」をデータだと思いついて探しても、通常は、そこには「魚」がないことに気付くだけである。(この気付きは早ければ早いほど修復がききやすい。)

なぜなら、データ収集初期の段階であれば、捉えようとしているものが「魚」のような明確な形をしていることに気が付いているはずがないからである。よしんば、「魚」の形をしていると事前に知っているとしたら、あなたは以前と同じ研究をしたか、過去の研究と全く同一の追試をしていることになり、そのような研究は一応ここでは除外しておきたい。しかも、網で魚をすくいあげても、そこにいる魚は水の中にいるわけではなく、もしあなたが初めて魚を見たとしたら、水か

らあげられた魚が動くことも呼吸することもできずに死んでいく様をみるだけで、それが魚の何を意味するであろうか。

これに対して、②のスコップで土をとるといふ行為は、地面という境界もなく際限もなく広がっているものの、一部を切り取る行為であり、その一部から全体を推量することが、魚から海を推量するよりも容易であることからわかるように、一般には、データを採取する行為に近いといふことができる。(もちろん、魚を研究対象とし、魚群の中から魚をとるのであれば、それは②のイメージに近いことになる。)

つまり、データをとるといふ行為は、際限なく広がる現実を何らかの方法で切り取ることに他ならない。したがって、必要なところだけを切り取ることはできない。むしろ、最終的に必要でない判断される部分があるからこそ、必要な部分が見つかるわけで、逆ではないことを理解することが大切である。

## データ収集の陥穽

データをとるといふ行為が何となくイメージできたとしたら、次はどのようにデータをとればよいのが工夫が必要だ。社会科学の対象は、地面や魚のように視覚的に捉えられるものではない。経営学の対象である企業も「企業」としては見ることはできない。もちろん、本社や工場などの建物やそこで働く人は見えるし、声も聞こえるので、それらが手がかりになるとはいえ、そこから意味のあるデータを切り取ることは容易ではない。さらに、言葉にはなっていないけれども、人の頭の中にだけあるようなことを取り出すことは本当に大変な作業である。インタビューや質問票で何とか考えると考えるかもしれないが、そこにも思わぬ陥穽が潜んでいる。

ここで留意しておかなければならない大切なことは、研究において最も必要とするデータは、最も必要としているがゆえに、直接的にとることができないというアイロニックな事実である。たとえば、前回と同じような例で言えば、「企業の業績評価システムはうまく機能しているのか」という問題を立てて、インタビューもしくは質問票で「御社の業績評価システムはうまく機能して

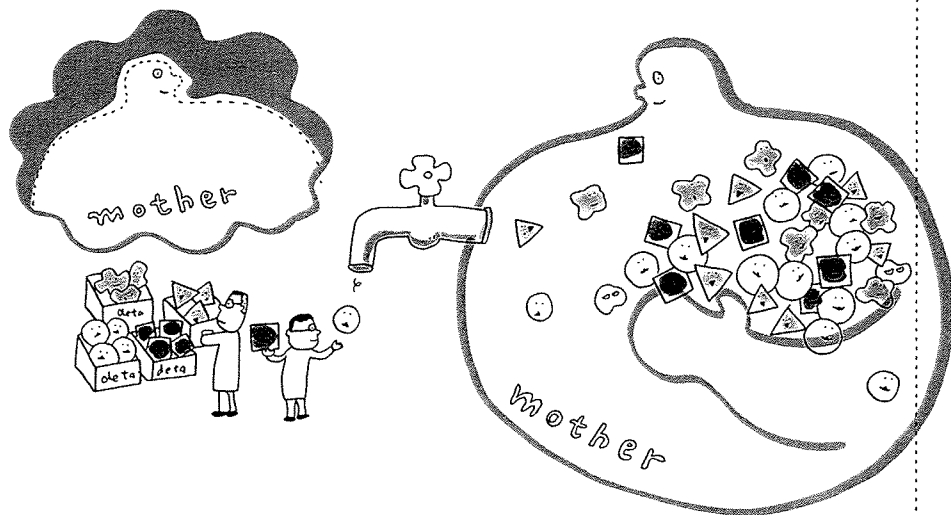
いますか?」と質問して、「はい」、「いいえ」等の回答そのものを業績評価が機能していることの指標とするような研究は妥当なものと言えるだろうか。極論すれば、そのような方法は、その種の研究において最も重要な「うまく機能する」という意味を回答者の解釈に委ねてしまっている点で(つまり研究者にとってはブラックボックスのまま)、研究の名に値しないと言いついてもよいかもしれない。しかし、このような「研究」は大変多いことも事実である。

たとえば、恋人の心変わり心配なときに、「私のことを好きか?」と直接的に聞いたとしても、その返事に対して相手が「はい」と答えようと、「いいえ」と答えようと、それを直接信じていることができるほど人間とは単純なものかどうかを考えれば、上記のような質問の浅はかさが明確になる。結局は「そんなこともわからんようになったんか」と言われるのが落ちである。ここは、聞きたいことをぐっと我慢して、相手が待ち合わせに遅れないように来るのか、服装に変化はないのか、話が途切れたときにどのようなしぐさをかなど、相手の言動を注意深く観察しなければ、結論は導けないはずである。

この原理は研究にもそのままではまる。研究において、もっとも聞きたいことは直接聞くことはできないのである。正確に言えば、直接聞いたとしても、その結果は、「〇〇と聞いたら××と答えた」ということ以上の意味はない。つまり、研究者が考えなければならないことは、「業績評価がうまく機能する」というデータをとることではなく、どのようなデータをとれば「業績評価がうまく機能する」と主張することができるかということであり、そのしぐみを示すことである。これはひとつの理論であり、理論とデータは、データ収集という行為が理論的営為である以上、密接不可分の関係にある。

研究におけるデータの収集はこのように一筋縄ではいかないものである。しかし、これは研究の難しさに関する問題ではなく、研究という行為に内在する構造的な特徴である。そのことに気付けば、それだけで研究が進むことは保証できないが、少なくとも研究の視界は広がるはずである。視界が広がれば、データも増えることは構造的に保証できる。

※本稿は連載することになりました。初めて修士論文以上の研究に臨む方を念頭にして、研究の本質に深く関係するにもかかわらず、一般的な研究方法論の本ではあまり触れられていないことを書くようにしています。感想や質問・要望があれば、kokubu@kobe-u.ac.jpまでお知らせください。



# データ分析と論証

神戸大学大学院経営学研究科 教授

國部 克彦

Katsuhiko Kokubu

## データ分析の対象

問題を立てることができて、データが集まったらいよいよデータを分析して、その結果を論証しなければならない。まさに研究における佳境である。データ分析といえば、定量データに対する統計分析がすぐに思い浮かぶかもしれないが、前稿同様、定性データの分析はもちろんのこと、学説研究や資料分析も研究素材の分析という意味で、本稿で定義するデータ分析として捉えることができる。

データ分析の段階になると、何らかの結果を出そうと懸命になるあまり、多様な手法を適

用しすぎて、結局、何が明らかになったのか良く分からない研究に出会うことが少なくない。このような研究は、しばしば「探索的研究」と称されるが、なぜ探索が必要なのかを熟慮しないで「探索」しても、結果の羅列に終わってしまうことは必定で、分析結果を羅列するだけでは研究とは成り得ないことを最初に理解しておく必要がある。

なぜ、分析結果の羅列が研究ではないかと言えば、データを分析することは研究の手段であって、目的ではないからである。ここを取り違えると、いつまでたっても「研究」の世界に入ることはいかない。研究の目的は、データを通してその奥にある関係性を抽出することである。統計分析的に言えば、サンプルを分析して母集団の性質を推定することであり、これはすべての研究に共通する。学説研究であっても、取り上げた学説を分析することで、その奥にある共通の考え方や課題などを指摘するわ

けだから、構造的には同じである。

つまり研究の目的は、社会の中にすでに存在している何らかの関係性を、取り出すことにほかならない。これは、社会科学のみならず、自然科学でも同じである。(これに対して、実験室で事実が構築されるという立場もあるが、ここでは深くは立ち入らない)。したがって、データ分析とは、データを入手したら闇雲に結果を求めるような行為ではなく、データの背後にある関係性を取り出すことができるように、分析方法を選択しなければならない。

データの背後にある「関係性」とは、言い換えれば、理論に他ならない。したがって、データ分析とは、既存の理論を検証するものか、新しい理論を構築するものか、どちらかでなければ意味がない。先に述べた分析結果を羅列するだけの研究が、研究の名に値しないのは、そこには理論がないからである。

ここで理論といっても、大げさに考える必要はない。要素と要素の間に一定の関係性が存在しているとすれば、それはすべて理論とみなしてよい。しかし、関係性とはいっても「一定の」というところが重要で、「一定の関係性」は分析対象としたサンプルが異なる場合でも成立している必要がある。しかし、データ分析だけでは「何らかの関係性」は指摘できても、完全な「一定性」までを示すことは難しい。データ量は常に有限であるから、データ分析には必ず限界がある。そこで論証が必要となる。

## 関係性の論証

データ分析から何らかの理論を導出するためには、その正しさを論証する必要がある。新たな理論を一から構築することは初学者には至難の業であり、通常は、既存の理論に何らかの追加を行う場合が多いと思われるが、その場合でも追加された部分の正当性を示す必要がある。

理論とは要素と要素の間の一定の関係性を意味するので、その関係性がどのように成立しているのかを説明することが論証の第一歩である。そのひとつが、要素間の因果関係である。因果関係など、すぐに分かると思

われるかもしれないが、何が原因で何が結果かを決めることは実は非常に難しく、人間がしばしば原因と結果を取り違えることは哲学上のテーマでもある。

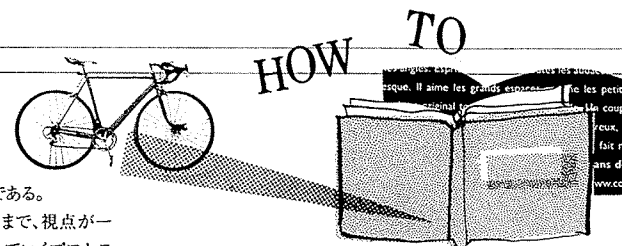
たとえば、鈴木さんと田中さんが口論をして仲が悪くなったでしょう。この場合、「鈴木さんと田中さんが口論したから仲が悪くなった」というのは一つの推論であるが、この因果関係を逆転させて、「鈴木さんと田中さんは仲が悪かったから口論した」と考えることも立派な推論である。つまり、原因と結果は多くの場合、相互に入れ替えることが可能であり、因果関係は一般に考えられるほど単純なものではない。

ということは、因果関係は2つの要素だけで決めることは難しいことになる。そこで、関係する要因の幅を時間的・空間的に拡張することはひとつの有力な対策である。つまり、鈴木さんと田中さんが口論する前の状況を分析すれば、より適切な推論が導出できるはずである。しかし、これも極限まで遡ることは不可能なことがすぐに分かるであろう。鈴木さんと田中さんの最初の出会いまでは遡ることが仮にできたととしても、それ以前の心理状態や環境が影響している可能性を考えれば、完璧な理論は断念しなければならない。

しかし、幸いなことにわれわれは完璧な理論を求められているわけではない。ある一定の限界の中で議論せざるを得ないことを宿命付けられており、重要なことは境界の範囲をわきまえた上で、理論の完全性へ向けた方向性を示すことである。その意味で、研究で重要なことは結果ではなく、結果を導出したプロセスにある。

また、論証していくときに常に注意すべきことは、今議論していることの反論の可能性を常に意識しながら、論を進めることである。反論の可能性を残したまま2段階進むよりも、反論の可能性を吟味しながら1段階進むほうが、理論としての頑健性は強いと判断されるのであるが、初学者にはどうしても階段を何段も進まないという研究ではないというような錯覚に囚われている人が多い。砂上の楼閣をいくら建てても研究ではないことに早く気付いた人ほど、堅実な研究に向かうことができる。





## 論文的思考を立ち上げるには

神戸大学大学院経営学研究科 教授

國部 克彦

Katsuhiko Kokubu

### 研究としての思考とは何か

論文とは論考という言葉もあるように、ひとつの思考を披瀝するものである。思考とはプロセスであり、論文では思考のプロセスを、段階を追って示す必要がある。たとえば、「問題の設定→先行研究の中での位置づけ→論証すべき仮説の提示→実際の分析→結果の提示と解釈」、はひとつの標準的な流れであり、このような構造が論文的思考の形である。学問の世界では、一定の形に入っていないものは、思考とはみなされず、説得力を持たない。

もちろん、研究生生活を何十年も続けてきた碩学であれば、標準的な形を崩しても、一定の思考を伝えることができるようになる。あるいは、崩した方が、より良く伝わることもある。これは、たとえば若いときは写実的であった画家が、後年に抽象画へと転向するようなものである。抽象画の方が描きたい対象にダイレクトに迫ることができるが、その意味を伝達するには技術が必要となる。したがって、写実画の蓄積があつてはじめて、抽象画が生きるように、研究においても、修士論文や博士論文の段階では、基本に忠実な論文の形を学ぶべきであり、その形が自らの思考を深める手段にもなる。

このように、論文を書くときには思考プロセスを明確にする必要があるが、それはそのような思考にたどり着いたプロセスとは別のものである。この点を初学者はしばしば混同してしまう。論文審査をしていると、なぜこのような文献がそこで議論されているのか、なぜこのような調査項目の結果が説明されているのか、疑問に思うことがある。口頭試問などで尋ねてみると、「この本はしっかり勉強したのでどうしても論文に入れたかった」、「このような調査項目を入れていたので説明した」というような返事を一再ならず聞くことがある。また、これは学生の論文に良くみられるのだが、Aという文献を読んだ次にBという文献を読んだ→そこであることが分かったので実際に調査してみた→その結果このようなことが分かった、というような構成になっていることがある。これらの事例は、勉強のプロセスを記述しているものであって、論文的思考の形ではない。

研究論文であるべき学位論文が、このような勉強のプロセ

スに関する記述になっていることは、社会人院生の論文でもしばしば見受けられる。もちろん、勉強のプロセスを経なければ、論文は書けないのであるが、論文として書くべきことは、ひとつの論理的な思考であつて、これまで勉強してきたことの羅列ではない。研究日誌は個人的な記録であり、研究論文ではないことを理解しなければならない。

たとえば、あなたが調理人だつたとして、購入してきた素材がもったいないからといって、本来捨てるべきところで調理し出したらどうなるであろうか。また、肉と魚を両方買ってきてしまったので焼肉と刺身を同時に出すようなことをすれば、それが新規の創作料理でない限り、顧客を逃すことになるであろう。創作料理を出すにはかなりの年季と技術が必要で、買ってきたからという理由だけで調理されては困るのは客のほうである。研究論文もそれと似たところがある。勉強してきたことを全部入れようとするのは、その時点で、研究の意義を理解していないことを示すようなものである。

### 視点の一貫性をいかに確保するか

プロの研究者であれば、すでにそれぞれの考え方が確立されており、それを論文に顕現するように仕事を進めることができる。しかし、学位論文のように初めて論文にチャレンジする場合には、思考の枠組みが最初から出来上がっているわけではないので、勉強してきたプロセスを論文の思考プロセスと取り違えるようなことが頻出するのである。

論文を書くための勉強も、論文で論証すべき思考もプロセスであるため、この2つは混同しやすいが、両者を決定的に区別するのは、思考する主体の一貫性である。勉強のプロセスは、研究する者が自ら成長するプロセスでもある。ある文献を読んだことを学び、ある調査をして現状を学ぶことは、文献を読む前と読む後や、調査を実施する前と後では、研究する主体の知識水準が異なるので、同一の主体が思考していることにはならないのである。書き手が、本を読みながら徐々に成長していくプロセスは、研究者としての成長過程という意味では興味深いかもしれないが、それはその研究の結果とは別のものであり、研究プロ

セスの記述はそのままでは論文とはならないのである。

したがって、論文的思考とは、最初から最後まで、視点が一貫していることが重要である。もちろん、研究していくプロセスにおいては、どのような場合でも新しい発見があり、成長していくのであるが、論文の執筆を行う時点においては、その内容について限界を含めてすべてを理解する立場に立たねばならない。逆に言えば、論文を書くにあたっては、その論文についてのすべてを理解した立場からでない、思考の一貫性は担保できないのである。1章を書いているときの著者と、4章を書いているときの著者の思考レベルが同じでなければ、思考の一貫性は保てない、読者は混乱することになる。

しかし、一貫した思考を得ることはかなり難しいことでもある。多くの文献を読みこなし、いくつもの調査をしなければ、一貫した思考を得ることはできない。何年も研究を続けていけば自然と身についてくるが、学士論文や修士論文の段階では、そのような思考を最初から求めることは困難である。しかしだからといって、勉強のプロセスを論文化することは避けねばならない。研究である以上、勉強のプロセスを思考のプロセスに転換しなければならない。

そのためには、研究プロセスを経た後で、それをそのまま論文にするのではなく、結論を得た時点でもう一度すべてを検証し直して、書き直すことが有効である。以前のコラムでも述べたように、研究における問題とは解答とセットで初めて有効に機能するものである。したがって、まずは何らかの解答にまで何とかたどり着くことが必要であるが、それで終わりではない。今度は、そのたどり着いた道をもう一度なぞってみることが重要である。そうすることで、本当に必要なものや、余分なもの、無くても構わないがあればもっとよいものが見えてくるはずである。その意味で、「論文を書くべき最も良い時期は論文を書き終えた時である」という言葉は、皮肉ではあるが一面の真理を示している。

問題と解答は、出発地と到着地といってもよい。到着地が分からなければ、研究にはならないが、到着地に着いただけで、その行程を詳細に記述されても、旅行記としては面白いかもしれないが、それが到着地へ至るためのベストの方法である必然性は説得できない。それを研究に昇華するためには、面倒でもう一度出発点に戻って、到着地までの行程を辿りなおすことが必要だ。到着地が分かった上で同じ道を行けば、必ず、最初は見えていなかったことが見えたり、もっと良い方法が見つかったり、間違いに気付いたりする。

研究であれば、当然、文献の読み直しや、調査のやり直しが必要になる場合もある。しかし、初めに大掛かりな調査をするとあとで修正することが困難になってしまう。したがって、その場合は、プレ調査を行って到着地点を確認した上で、本格的な調査を行うための工夫が必要となる。

### 努力の方向性を考える

本稿は2008年春号から続いた連載の区切りでもある。問題の設定からはじめて、データの収集、分析と論証、そして執筆のところまで解説してきた。この連載で重視してきたことは、論文やロジカルシンキングの方法ではなく、それぞれの局面において努力すべき方向性であった。「自転車の乗り方」という本を読んで(そのような本があるかどうかは知らないが)、自転車に乗れるようになった人が多分いないように、論文の書き方という本を読んで論文を書けるようになった人はいない。重要なことは書き方ではなく、書くための努力であり、その方向性を間違わないようにすることである。

自転車であれば自分が自転車に乗れているかどうか自分で判断することができる。しかし、研究については、一度も研究をしたことのない人は自分が書いているものが論文になっているかどうか判断することができない。そのために指導教授が必要となる。指導教授の役割は、自転車を支えることではなく、自転車に乗れているのかいないのかを評価することである。それ以前に、乗ろうとしている「自転車」が本当に走れるものかどうか、乗ろうとしている「人」がそれだけの能力を有しているかどうかを見極めることも、その仕事に含まれる。

その意味で指導教授には知識面での指導をあまり求めてはいけない。学位論文である以上、その特定の分野では指導教授以上の知見を披瀝しなければ論文の意味がない。しかし、それが研究になっているかどうかの形の面では、指導を求めべきである。逆に言えば、指導教授による形の指導を、内容の指導と混同してはいけない。内容の指導については、学問として議論の余地が残されているが、形の指導は学問になるための要件である。ここでいう形とは論文の形式ではなく、研究の形であり、それは努力の方向性を規定するものである。研究の形を会得すれば、内容は自然に定まってくるようにできているのである。

最後になったが、孟子の次の言葉を持って締めることにしよう。「有為者辟若掘井、掘井九仞不及泉、猶為棄井也。(孟子、盡心章句上)」「何かを為すということは井戸を掘ることに似ている。たとえ、十数メートル掘ったとしても、水が出てこなければ井戸を掘ったことにならない。」「井戸」を「研究」に置き換えれば、研究の世界にも通じる至言である。「井戸」を掘るには「水」が出なければ意味が無いが、そのためには「水」が出るところを「水」が出るまで掘る必要がある。